

日もいとながきに①つれづれなれば、夕暮れのいたう霞み^{アタル}に紛れて、かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々は帰し給ひて、惟光の朝臣とのぞき給へば、ただこの西面にしも、持仏^{ミツブツ}を奉りて行ふ、尼なり^{イヘリ}。簾少し上げて、花奉るめり。中の柱に寄り居て、脇息の上に経を置きて、②いとなやま^いしげに読み^みたる尼君、ただ人と見えぬ。四十余ばかりにて、いと白うあてに、やせたれど、面つきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそが^ウれたる末も、なかなか長きよりも。こよなういまめかしきものかなと、あはれに見給ふ。

清げなる 大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりにやあら^エむと見えて、白き衣、③山吹^{ヤマブキ}などのな^なえたる着^きて、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似る^オべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

「何事ぞや。童べと腹立ち給へるか。」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたところあれば、子なめりと見給ふ。「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを。」とて、いと口惜しと思へり。このゐたる大人、「例の心なしの、かかるわざをしてさいなまるこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとをかしう、やうやうなりつるものを。鳥などもこそ見つけくれ。」とて立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言乳母とぞ人言ふめるは、この子の後ろ見なるべし。

尼君、「いで、あな幼や。言ふかひなうものし給ふかな。おのが、かく今日明日におぼゆる命をば、何とも思したらで、雀慕ひ給ふほどよ。④罪得^{つみ}ることぞと、常に聞^{きこ}いぬるを心^{こころ}憂^{うれ}く。」とて、「こちや。」と言へば、ついゐたり。

面つきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かなと、目とまり給ふ。さるは、限りなう心を尽くし聞こゆる人に、いとうよう似奉れるが、まもらるるなりけりと思ふにも涙ぞ落つる。

尼君、髪をかきなでつつ、「けづることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとほかなうものし給ふこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかからぬ人もあるものを。故姫君は、十ばかりにて殿に後れ給ひしほど、いみじうものは思ひ知り給へりしぞかし。ただ今、おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむ。」とて、いみじく泣くを見給ふも、すすろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。

⑤生^なひ立^たたむ^むあり^りかも知らぬ^し若草^{わかくさ}をおくらす^お露^{つゆ}ぞ消え^きむ^むそらなき

またゐたる大人、「げに。」とうち泣きて、

初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えむとすらむと聞こゆるほどに、僧都あなたより来て、「こなたはあらはにや侍らむ。今日しも、端におはしましけるかな。この上の聖の方に、源氏の中將の、わらはやみまじなひにものし給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。いみじ

問一. a 平安 b 中期 c 紫式部 d 五十四 e 光源氏

…源氏物語は平安時代に紫式部によって書かれた日本最古の長編物語で、全五十四帖からなる。

主人公光源氏は天皇である桐壺帝と桐壺の更衣から生まれるが、臣籍に降下し、様々な女性と恋愛を繰り広げる。光源氏没後の後半は、源氏の血を分けた薫と匂宮が主役となり、結末を迎える。

問二. ア 存続

イ 詠嘆

ウ 受身

エ 推量

オ 当然

問三. イ

問四. イ

問五. ア

問六. 罰を受けることになりますといつも申し上げているのに、情けないこと

問七. 若草…女子

霧…尼君